

# *d*-Wörter の 問題 点

——その基本的性格規定について——

小 島 伊 三 男

## I

ドイツ語には、da, dann, das, der, die など、[d] という音素で始まり、一般に指示の意味をもつ一群の言語形式がある。従来の品詞分類によると、それは副詞、代名詞、冠詞などに属する。この一群の形式は総括して、*d*-Wörter といわれる。dieser, dort, さらに des, dessen, dem, den などの変化形, dafür, daher, darin などの合成語もこれに入るので、その数は意外に多い。だが、重要品詞として名詞または動詞の分類に入るものは一つもない。dasein, dastehen, また広い意味で *d*-Wörter に所属すると認められる du の派生語 duzen などの動詞形は、形態的関連性はあるにしても、造語由来から考察して *d*-Wörter の本来的系列に組み入れることはできない。*d*-Wörter が名詞または動詞の重要品詞に所属せず、一般にそれは短い小さい簡潔な形式であり、文構造上の二次的な機能しか持たぬ品詞であること、しかしその反面、冠詞として使用され、ドイツ語においては極めて高い頻度数を持ち、どんな短い文章においても *d*-Wörter の一つにはほとんど常に出合うということ、これらが *d*-Wörter の特徴的性格になっている。

英語においてドイツ語の *d*-Wörter に対応するものは、[ð] を初頭位音素とする this, that, the, then, there などであり、同じくすべて指示、またはそれに類似する意味を持つ。Bloomfield によると、初頭位音素 [ð] が表われるのはこの一群の言語形式に限るとなっている。指示語が初頭位音素 [d], または [ð] を共通に持っているのは全くの偶然か、それとも何か必然的な言語発生上の理由があるのであろうか。ドイツ語の [d] と英語の [ð] の間に歴史的関連があり、同一音素の違った発展であることはすでに音韻変化の法則で証明されているが、それを今問題にしているのではない。一般に指示の意味を持つ言語形式が、[d] または [ð] の歯音で始まることに注目したいのである。言葉の音と意義の間に古来漠然と信ぜられて来た必然性を否定し、能記と所記を結びつける紐帯を全く恣意的なもの、社会習慣的なものと規定し、これを言語記号の本原的特質と規定したのは Saussure であるが、その Saussure

でさえも、たとえ二次的重要性しか持たぬにせよ、擬音語と感叫語の中には自然音と必然的につながる象徴的起原を認めざるをえなかった。*d-Wörter* は感叫語に比べると問題にならぬほど重要な文構造上の役割りを持つ。従ってそれらには文法的、言語学的に著しい手続きが加えられ、その結果自然音との距離はますます大となり、自然音との連結を認めることは困難であるが、Porzig が、*d-Wörter* を音声身ぶりと規定し、〔d〕〔ð〕音の必然的起原を指適していることをここでとりあげたい<sup>1)</sup>。言葉形式とならんで、あるいは言葉行為よりも前に、人間は現実支配の形式として、身ぶりを使用する。その身ぶりは指示身ぶりと描写身ぶりにわけられる。指をさしのばして指示するか、拳をかためて力を描写し象徴して、相手をおどす。いずれにせよ身ぶりは身体運動であり、それに伴い発声器官、唇や舌が自然に参加し、音を発する。つまり、発声器官の身ぶり運動から自然に発する単純音がある。それを身ぶり音という。幼児語はこの身ぶり音から生れる。また指示身ぶりに同伴する成人の舌の運動が観察され、その結果多くの国語における指示詞が、歯音により特徴づけられる理由が根拠づけられる。二人称人称代名詞 *du* もその意味でこの系列に入る。

Trübner の辞書によると、*der* の ahd. mhd. の形式 *der*, *diu*, *daz* の土合は、idg. の語幹 *to-* であり、Got. Anord. 及び Ags. で男性及び女性の主格単数を作るのは別の語幹で、それは Got. では *sa*, *sō*, *thata*, Anord. では *sā*, *sū*, *that*, Ags. では *se*, *sēo*, *thæt* (英語では格数全部にわたり *that*) である。古代インド語にもそれに対応する *sa*, *sā*, *tad* があり、つまりインドゲルマン諸語において指示詞 *der* は、初頭位音素として歯音 *t* と *s* を持っていたのである。ドイツ語の *so*, *solch* はこの *s* 語幹から由来したものであって、これを同様に *d-Wörter* の系列に入れる。ともあれ、*d-Wörter* はこのように身ぶり音に根ざす誠に古い起源を持つ言語形式であり、音声言語に先行する身ぶり言語段階において、すでに発声言語の胞芽として固定し、また現在における十分に発展した音声言語体系の中にあっても、音声の中に身ぶりをひめた原始的な生々しいエネルギーを持ち、いわばそれは音による指さし、耳でつく手の合図であって、常に「あれをみよ!」という身ぶりや命令を持つ。*Da kommt ein Mann. Er ist da.* この文の *da* には聞き手の視線をその方向にむける力強い指示がある。

## II

Hans Glinz が、*„Die innere Form des Deutschen“* の中で *d-Wörter* を初めて取りあげた手続きは大変面白い<sup>2)</sup>。これは *d-Wörter* の性格規定に

とって極めて暗示的であるばかりではなく、Glinz の新文法体系樹立の方法論と関連して極めて興味深いのである。Glinz は言語の外にある原理、たとえば論理学の原理や概念から文構造を分析することを排斥し、ドイツ語そのものの内部から言語の内面的法則を発見しようと試み、その途上で〔d〕音で始まる特殊な機能を持つ一群の言語形式にぶつかり、それを *d*-Wörter と名づけたのである。Glinz により、先づ文と語が定義され、その中間に文肢 (Satzglied) が確認される。文は Kernsatz, Spannsatz および Stirnsatz に分類される。この中の Spannsatz は従来の定形後置文に当る。この Spannsatz において文頭の位置が特別価値を持ち、さらにそこに位置しうる語の形式に特別の限定があることが発見される。すなわち従来の文法でいう従属接続詞、および〔w〕又は〔d〕を初頭位音素とする語形の三種しかない。Glinz はそれを次のように規定した。

1. Spannsatz の初頭位にのみ現われる表現: (daß, wenn, weil, obschon, bevor, als ob……)。
2. Kernsatz の初頭位文肢にもなることがあり、その時は通常疑問の意をもつ表現: (wo, was, wie, womit, welcher, wann) 等。
3. Spannsatz の初頭位の外に、文中の任意の位置をしめることができ、またしばしば Unterglied にもなりうる表現、しかし第2群の表現が Kernsatz に使用された場合のようにすぐに理解しうる規則的価値変換を起さないもの: (der, die, das, vor der, den) 等、さらにまた (da, wie, als, bis……) 等。

第二群の表現はすべて〔w〕で始まり、第三群の中に〔d〕で始まる系列があり、それを *w*- および *d*-Wörter といい、was/das; wer/der; wann/dann は厳密に対応し、wo/da; womit/damit はやや厳密さを欠くが平行関係にある。この *w/d* の系列は、同じように規則的に平行し、直接に把握しうる意味の差を持つ。*w*-Wörter は疑問、*d*-Wörter は指示である。しかし *w*-Wörter は Spannsatz に用いられると疑問の意を失うのを原則とする。例示すれば、Ich weiß nicht, was er getan hat. Das ist alles, was du tun sollst. Wer das kann, soll mir willkommen sein. などである。さらに *w*-Wörter は、すでに明白に指示された単位と結合する *d*-Wörter と異なり、今までにそれとなく暗示的に指示されているが、いまだ特定の単位体として明確に限定されていないものを示す。Ich weiß nicht, mit wem du sprachst. これが *d*-Wörter ならば、Ich weiß den(od. den Mann) nicht, mit dem du sprachst. となり、特定の人物が明確に示されていることになってしまう。

Das Problem  $\left\langle \begin{array}{l} \text{das vor ihm lag} \\ \text{was Werner nun tun würde} \end{array} \right\rangle$  beschäftigte ihn sehr.

上文をみればその間の相違が尚よく確認されるであろう。

Glinz は *w/d* の対立を、疑問対指示、「一般的なもの」の輪廓づけ対「特定なものへの結合」と規定し、*d*-Wörter の基本内容は積極的指示、それに対し、*w*-Wörter はその基本内容に則して設置された、空虚なある場所の輪廓づけとなした。ある性格をもつ、たとえば時、所、人という意味を持つ空虚な場とは、その該当する内容、すなわち時、所、あるいは人について考えよ！だが、その内容をどの特定の方向に求むべきか、又認めることができるかについては、何一つ指示していないという意味である。*w*-Wörter を疑問と規定するのはそういう基本的内容であって、現実の文中に現われる *w*/Wörter は必ずしも文字通りの疑問の意にはならぬ。この点は *d*/Wörter も同じであって積極的指示はその基本的意義であり、それがどのような音の抑揚をうけ、また文中のどのような位置を占めるかによって逆に疑問の意になることもありうる。文構造の中に取り入れられた場合の語形式の意味と、その語形式に本来備わっている基本的意味とは、次元の異なった場における展開であって、これを常に同一視する要求は正しいものではない。

Wer geht mit ?

Wer nur alles mitgeht !

Wer mitgehen will, den bitten wir.....

Der geht mit.

Der Vater geht mit.

Der Mann, der mitgeht.

Der geht mit ?

従来の文法体系の語詞論ではまず品詞が定義され、その品詞分類区分に所属するものとして *d*-Wörter はばらばらに取りあげられた。音の同一性によりある相互関連性を認めながらも、それを統一的に把握する立場が樹立されていなかったのである。Glinz においては品詞の定義をなす前に *w/d*-Wörter の特異な一群が出現してしまう。そこで Glinz はこの一群を一つの Wortart として把握しようと努力する。Wortart は語類、あるいは品詞と訳される。その機能が多岐多様にわたっているとはいえ、*w/d*-Wörter は根本的同一体として把握されるべきだと提唱する。同一の語類、あるいは品詞に属する言語形式が、音の抑揚という二次音素、また文中の位置などの要素によって、文における二次的な違った機能と意味を持つと考える。それ故 Glinz にとっては、冠詞として使用された *der* も、指示代名詞として使用された場合の *der* と基本的には違ったものではない。Glinz の *w/d*-Wörter の Wortart 論は、

„Die innere Form des Deutschen”において必ずしも成功しているとは認められず、彼自身その明確な規定に苦しんでいる。しかしながらこの試みは、*w/d-Wörter* の使用頻度数の高いドイツ語においては、何か根柢のある理論の発展を予思させる、ある暗示的な重要な意義を持っている。

### III

*w-Wörter* は「空虚な場」を示す言葉と Glinz によって規定された。そしてそれが求補疑問文に用いられることから帰納して、その空所を充たすことを求める、未来への積極的エネルギーの内在が確認できる。いずれにせよ *w-Wörter* は未完結の言葉であるが、それに対し *d-Wörter* は積極的指示詞として、何ごとかをすでに指示した完結感をもつ。だがもう一步深く検討すると、*d-Wörter* も別の意味で空虚な言葉である。da は特定の場所を指示しうる。だがそれがいかなる場所を指示しているかは、da という言語形式そのものからは推定する方法がない。da の内容は空虚で、そこからは何の具体的知識をうることもできない。内容が空虚で、そのためにかえて別の具体的内容を持つ言葉の代理をなしうるものを代理形式という。Bloomfield によると、代理形式は部類意味と代理タイプを持つ<sup>4)</sup>。部類意味とは、その代理形式の代理領域となる形式部類の意味であり、たとえば英語の代理形式 *you* の部類意味は英語の体詞表現の部類意味に等しい。*you* は人を表わす体詞のみならず、聞き手と見なされた場合にはどんな動物、または「もの」、抽象体を表わす体詞の代理もする。代理タイプとは、その代理のなされる慣習的狀況をいう。*you* は発話における話し手—聞き手関係という状況に基く。そこで代理形式 *you* の意味は、次のように定義できる。

A 部類意味—体詞表現という形式部類の部類意味に同じ。いわゆる「事物」あるいは「対象」。

B 代理タイプ—「聞き手」

さて代理形式の人称代名詞はこの方式により容易に定義されうるが、指示および不定代名詞については部類意味は別として代理タイプの規定に関し困難な問題が生れて来る。代理を広く考えれば、*thing*, *person*, *object* などの普通の言語形式もある意味の代理作用を行う。これらは極めて包括的な意味をもち、従ってその下位概念またはそれに所属する個のすべての代理を行い、それを指示することができる。Tom の代りに *the person*, *der Hund* の代りに *das Tier* が用いられ、この両者は意味の等価性を持つ。しかしこの代理を成立させるのは言葉の意味という実際の問題であり、修辞学の要求である。それに対し代理形式の等価性を決定するのは、発話の場の状況であり、文法的規定

である。the person は常に Tom の代理をなしうるが、I が Tom の代理をなしうるのは、Tom が話し手である場合にのみ限定される。また Tom が発話の場において違った状況にあれば、それぞれ you または he で代理される。代理形式は発話状況によって決定され、代理タイプはこの発話状況との直接関連性を持つ。ところがこの発話状況は千差万別、さらに時間とともに変転し、それを軸にした関係の規定は大変困難である。だが *d-Wörter* が指示を意味し、しかも指示代理タイプが話し手の立場からなされるものであるとすれば、*d-Wörter* の性格規定にとって問題の中心は発話の場だということになる。

一般に指示の代理タイプは、話し手—聞き手関係が軸になるが、それに関し K. Brugmann は、動詞について動作体様の区別が認められるように、指示詞については指示体様の差を考えるべきだと指適している<sup>5)</sup>。彼は Dexis という表現を用い、話し手から指示されるものへの距離に応じ、多くの言語でさまざまな Dexis が区別されるとなした。先ず私—指示 (Ich-Dexis) は、話し手自身を指示し、聞き手が話し手の人格そのもの、あるいはその支配領域や話し手の思考圏に所属すると考えられるものに、その視線を向けるよう要求されるときに使用される。Bühler の指示場「わたくし—ここ—今」体系の原点方向をいう。ラテン語の *hic*、ドイツ語の *dieser*, *hier* などがそうである。汝—指示 (Du-Dexis) では、聞き手の視線は話し手に直接対面しているものにむけられる。ラテン語の *iste* がその典型。あれ—指示 (Jener-Dexis) は、時間空間において汝—指示よりもっと後に、もっと遠くにはなれているもの、あるいは彼岸的なものを指す。ラテン語の *ille*、ドイツ語の *Jener* である。ところが Brugmann はこの外に Der-Dexis を独立させ、特別の位置をそれと与えている。それは、遠近の区別をせず、距離の意識についてはやや無関心に、だが話し手のすぐ近くにはないものを指すという。*d-Wörter* の中でこの指示タイプに属するものは *da*, *dann*, *so*, *das*, *der* であって、*d-Wörter* の中核体をなす。Der-Dexis が前の三者と異り距離意識が稀薄だということが重要な意味を持つ。そのみが空間性をこえた、ある別の次元、すなわち心理的論理的な実在性を直接指示するからである。*da* あるいは *dann* が時を指示するとき、現在ではなく過去、あるいはある条件の確立された後の時間を意味するのはそれに由来する。流動する時間において現在を把握したいものであり、実在性を確認した時間は常に現在からの何がしかの距離を持つからである。

## IV

*d-Wörter* の中核的意味が発話状況決定的であり、しかもそれが話し手からの単なる距離関係でないならば、*d-Wörter* の本質をなす *da-Charakter* の分析のためには、発話の場についてもっと深い分析を行わねばならない。

発話の場では話し手と聞き手が対立し、話し手は能動者、聞き手は受動者である。話し手は発話意図を言語に表現し、聞き手はその言語表現を理解する。この過程を Saussure は言の循行と名づけ、Bloomfield は刺激 - 反応の行動原型によって言葉行為を音声運動による代行行為と定義した。だがここで問題にするのは、その図式によって言語成立の基本過程を解明しようと試みている両者の立場ではない。言語は発話の場において初めて現実的な意味を持つ。それは抽象的な言語形式の現実化であり、むしろ場における現実的な言から素材として言語形式が抽象されるのだ。発話の場においては同じ言語形式が様々な意味の変容をうける。「この本、だれの本？」という発話は、場の状況や音の抑揚によって単なる平明な疑問文から鋭い叱責の意まで意味内容が変化する。この変化は言語のパロール的側面と規定され、言語の本質的内容であるとされるラングに対し、その個人性や偶有性のために言語研究の片隅に追いやられた。しかし単純な言語形式である指示語は、前述のようにその本質の意味が、この把え難い場から由来する。従って場が、いかに把え難い個人性や偶有性に充たされたものであるにせよ、なおその中に何らかの法則的なものを発見しえたとき、指示語とくに *d-Wörter* の意味が初めて解明されたといえるのではないだろうか。

まず発話の場において当然のことながら発話は相手に諒解されなければならない。この発話の諒解が実現したとき、一回の発話過程が完成したということにする。発話完成のためには、発話者は単なる能動者として全く任意の発話をなすわけにはいかない。そのためには相手の諒解可能性を予め測定しなければならない。言語は本来社会習慣的なもので、談話も当然相手を予想し、相手によって制約される。ある場における諒解可能性をその場の諒解性の密度ということにする。親しい友人、長年連れそった夫婦の間では共通の体験や思考感情方向の一致のために場の密度が極めて高い。密度の高い場では単純な言語形式が複雑な意味をもつことができる。場と意味との関係は形態心理学の素地と形態の関係にあたり、同一の円形が素地の違いによって違った意味を持つように、同一の言語形式が場の密度の差によって違った意味を持つ。言語の意味は場の密度と言語の形態と——意義素という術語が正しく定義できるものであるならばその意義素との相乗価である。代理形式の意義素は、極めて一般的な抽象的な従って現実性のない空虚なものである。だがそれはどの言語にあっても

一般的に簡潔な形式であって、その使用は言語の経済法則にかなう。「あれを持って来い！」だけで「あれ」が必要にして十分な意味を持つためには、場の密度がそれに応じて十分に高いものでなければならない。ところで密度の測定は話し手のなすもので、従って主観的で確実さの保証はない。つまり測定の見誤りがしばしば起りうるのである。「あれを持って来い！」「あれって何ですか？」こんな会話はよく聞く。又この間の言語使用に伴う話し手の微妙な心理描写は、劇作家や小説家によって技巧的に駆使される。

Luise : O! ich bin eine schwere Sunderin, Vater! — War er da, Mutter?

Frau : Wer, mein Kind ?

Luise : Ah! ich vergaß, daß es noch außer ihm Menschen gibt. — Mein Kopf ist so wüste. — Er war nicht da, Walter ?

Miller (*traurig und ernst*): Ich dachte, meine Luise hätte den Namen in der Kirche gelassen ?

これは Schiller の *Kabale und Liebe* の中のせりふである。Luise はここで初めて観客の前に姿をみせる。作者は女主人公 Luise の性格や状況を観客に今強く印象づけなければならない。代名詞 *ich* は *deiktisch* であるが、*er* は *anaphorisch* であって、だれを指示するか前もってあるいは直後にその名をあげなくてはならぬ。この代名詞 *er* の誤用によって、Schiller は Walter への熱情のために冷静な理性を失いつつある Luise を、極めて技巧的に適確に描写したのである。しかもこのせりふは Luise の登場直後、開口最初のせりふである。これこそ劇作家 Schiller の天才的な言語支配能力を証するものである。しかし場の密度の測定は、それ自身極めて微妙なものであるとはいえ、言語使用の長年の訓練と練習の結果、われわれは半ば無意識的に正しい測定を行う。横あいから自動車が飛び出してきたら、「危い！自動車だ！」と友人に言う。「危い！赤い小型の自動車だ！」など、言語の経済法則に反する不必要な形容詞をつけたりしない。「危いですよ。自動車がやって来ますよ。」というのは、危険に余裕のある場合の発話である。正しい言葉を使う訓練とは場の状況や密度にもっとも適切な表現をする訓練である。「この本、だれの本？！」「ふん、うるさいわね！」この会話は男女間の緊張した関係の上に立っている。だが、親しさは否定できない。親しさによって場が高い密度を持つ場合には言語は複雑な内容を持つ。文の省略は文法で問題にされるが、ここでは連続する多くの文が、その一部の文だけで結晶的に省略的に表現されている。緊張した場における複合文の省略形といえないだろうか。

話し手・聞き手関係において親しさが場の密度を左右するとすれば、数は逆比例的に密度を支配する。相手が一人でなく、三人になった場合は、三人の中



の最低の親しさの線まで、場の密度の予測を下げなければならない。話し手が複数者の代表であるならば、つまり ich が wir になれば、これも同じ制限を受ける。そして不特定の多数者に向い、不特定の多数者を代表して発話する場合、対人関係における最も一般的な平均的な密度が仮定される。その場においては言語形式は全く辞彙の意味に使用されるであろう。代名詞 wir で新聞記者が記事を書く場合などこれに当る。記者は言葉をその時代、その時において最も一般的に理解される範囲内の意味に限定して使用しなければならない。

場の密度を決定するもう一つの要素は、発言内容の直観性にかかわる。話し手-聞き手の直接体験しうる対象が言語に表現される場合、場の諒解予測性の密度は高い。この高い密度があつてこそ、本来空虚な指示詞が十分な比重を得て、動かし難い現実性に充たされた意味を獲得する。言葉が、直観から抽象、事物から精神に進むに従って現実性の比重はもちろん低下する。さらに現実性は、言葉が現場性を失いリレーをかさねるごとに低下する。例をあげると今AがBに向い机の上にあるリンゴを指し「このリンゴ(A)は特別においしい。」と言ったとする。Bはその報道をリンゴAを見ていないCに中継する。CはD、DはEと中継しEがAの所にやって来て、「リンゴAはこれだな」と確認して食べたとする。Eが受け取ったリンゴAという言葉は現実性の密度が極めて低い。だがAの所で現物をみた瞬間一挙にして十分な現実性の密度係数を取りもどす。この場合、「リンゴA」が同一の実在を指示し意味するという形式的同一性の要請はこの言語リレーの際にあらゆる言語技術をつくして表現されるであろう。Aの机の上にある、特別な赤い色をした大きなリンゴなどと、あらゆる規定詞を用いて同一性を描写するであろう。しかし中継された言葉においては如何なる場合にも現場性のもつ現実密度はない。現場性により実在にうらづけられた完全な密度係数、言葉はこの価値を理想とし常にその方向を目標としている。そしてこの方向の原点に位置する言語形式が直観の場における指示詞、つまり deiktisch な人称及び指示代名詞、さらに指示副詞なのだ。代理形式というのは場の外にいる傍観者の立場からの規定であつて、当事者にとってはそれらは代理のありえない絶対形式である。

言語の場は対人性と現場性を二要素にしてその密度が測定されるが、さらにそれは時間とともに変化し、ことに発話過程の回数をかさねる毎に著しく変化する。いや、ただ一回の発話過程でさえも場の状況、諒解予測の密度を一変することがある。例えば歴史的現在が過去の事件や事実を現在の動詞変化形を用いて描写し、聞き手の眼前にまざまざと事件が展開する印象を与える。話し手はこの技巧を用いるために、充分な事前の準備をしなければならぬ。話術をつくして相手の感興をひきつけ、自分の話の中に相手の心をとらえ、相手は時間を超越して過去の中に埋没し、さながら自分自身が現場にあつてそれを体験し

ている錯覚と陶醉感に襲われる。その瞬間を見さだめて話し手は事件が現在眼前で進行しているように、時称を現在にきりかえる。従って通常歴史的現在を使用する前には実際の過去時称が相当長く用いられる。だが、O. Behagelによると、“Denke dir, was mir gestern passiert!”の前置きだけで、その後の報道は歴史的現在になる例があるととなっている<sup>5)</sup>。「いや君、昨日はひどい目にあったよ。いいかね、僕が朝電車に乗っているとだ、するとその時……」と、その後は現在時称で話をつづけて行くわけだ。ただ一回の発話過程で、現在から過去へ言語の場は一変されたのだ。言葉とは、これほどの強い現実支配力を持つ。だが上例において話し手と聞き手が非常に親しい間柄であり、場の諒解予測性が元来極めて高かったことを無視してはならぬ。その条件があってこそただ一回の発話がこのような効果を上げたのである。これは特殊な例であるが、一回の発話過程は、話し手と聞き手の間に新しい諒解事項を生み、次の過程はその前提の上に展開されて行く。これを文脈などとも呼ぶ。ともあれ発話過程は一回ごとにその状況が変化し、従って諒解性の密度も変化する。外界が平穏無事であり、会話がなごやかに交わされているとしても、会話者の間の心理と精神の世界では、一回の発話ごとに何とかが常に大きく変化し躍動して行くのだ。極めて単純な指示詞においてもそれは同じである。だがその前に一般的に、言葉によって対話者の間で何が起るか、言葉は人間にとってどんな働きを持っているのか、それを少し深く Glinz によって検討したい。hier という単純な指示詞がそこでは深い意味をもって来る<sup>7)</sup>。

Glinz はテキストとして Hofmannsthal の喜劇 „Der Schwierige” の三幕八場を取り上げているが、ここではさらにその最初の部分だけを問題にする。

Hans Karl (*betroffen*): Helen, Sie sind noch hier ?

Helene (*hier und weiter in ihr ganz festen, entschiedenen Haltung und ihrem leichten, fast überlegenen Ton*): Ich bin hier zu Haus.

Hans Karl: Sie sehen anders aus als sonst. Es ist etwas geschehen!

Karl と Helene の間に交わされたこの単純な会話は、対話者二人の緊張した状況において極めて比重の高い重要な意味を持っている。だが第三者としてそれを理解するためには、その場の密度を知らなくてはならない。勿論一般的平均的密度の場を前提としても、この対話の意味はある程度形式的に理解できる。しかしその言葉の重さは分らない。とくに指示詞 hier は形式的空虚性しか持たない。さてこの対話の場の状況を説明すると、中年の男 Karl は二十一年下の令嬢 Helene をひそかに想っているが、世間をおそれて恋を打明けない。

ある晩令嬢の家で催された夜会の席で、ふとその心をもらしてしまふ。令嬢は驚き困乱する。Karl もあわてて逃げ去り恋を断念する。だが彼は未練の余りふらふらとその家にもどって来る。一時困乱した令嬢は自分の心にかくれていた Karl への関心と愛情を知り一切を投げうって彼の後を追う決意を定める。この決意を Karl はまだ知らない。この二人が Helene の家の玄関先でばったり顔を合わせたのが、さきの場面である。あたふたと逃げ出した Karl がやはり自分からもどって来た姿をみて、Helene は自分の決意の正しさを知り気持ちも落ち着き、むしろ彼の先を越した軽い優越感さえ覚える。Helene の心を乱したまま辞去した Karl は、この一変した Helene の態度を見て驚き怪しむ。「ヘレンさん、あなたはまだここにいらっしゃるのですか？」この発話は確認と疑念である。Helene をあきらめた Karl にとっては、彼女はもう遠くに立ち去った人である。彼の心理的空間ではもうここに居ない。その Helene を今ここで発見したのだ。未婚の娘がここ、即ち父の家にいるのは当然であるが、Karl は今、内面の世界でも Helene が近い存在であることを確認したのだ。疑念とは遠い存在が一変して近いものになった理由と根拠についてなお納得しがたいことをいう。Helene は現に疑いもなく眼前にいる。ただその理由が分らないのだ。従って „Helen, Sie sind noch hier?“ は „Helen, ist's möglich, Sie sind noch hier.“ あるいは „Helen, ich bin überrascht, Sie sind noch hier.“ と書きかえることができ、疑問文というよりむしろ感嘆文といってもよい。いずれにせよこの文は疑問文の持つ、ある事実を率直に知りたいという素朴な要求を表わしているのではない。その事実を Karl はすでにその眼で確認しているからだ。この文は彼がひそかに熱望している事態、恋の実現の尚確固たる証明をえたいという望み、眼前の事態を両者の精神世界と内面関係の中へゆるぎなく組み入れ固定したいという熱望を表わしている。Glinz は言う。「言語の意味とは、外面的にすでに起った出来事を精神的に支配することである。Weisgerber の言葉をもってすれば、實在 (=Karl と Helene の出会い) の意識的自覚的存在形式 (=この出会いを Karl の感情及び体験の世界の中に正しく取り入れること) への移植である。」言語は外面の世界を描写し報道することだけが任務なのではない。言語があるということは常に外面的世界に内面的意味がプラスされ、外面的世界よりも高次の言語の世界が生れたことを意味する。

Helene の「ここは私の家なんですもの」という返事は、Karl が「ここ」という単純な言語形式に托した切実な願望を無視し、日常的な一般世間的な言葉理解、つまり一般的平均的水準密度で成立する場の言葉にひきもどしてしまっている。勿論この密度の高い場において成立する「ここ」の意味が分らなかったのではない。心理的に近い存在という喜びと驚きをこめた言葉に対し、こ

こは自宅だという日常的解釈をもって切っけかえし、Karl を慍くからかったのである。おそらく観客はここで笑い出すであらうし、またその笑いを誘うせりふ廻して演技されねばならぬ。この後の場面は恋の決意をした強い小娘が、世故にたけた四十男 Karl を問いつめ、つつきまわし、逡巡する Karl がいやいやながら—zitternd というト書きが示す通り、こわごわと震えながら小娘の恋の決意を問いただし、うけたまわるという微苦笑を催す会話の連続となる。Helene の一見冷い拒否の態度の底には、これから展開される Karl との間の、自分の一生を決定する重要な対話に一切の運命をかける心備えのいさぎよさが示されている。少くとも Helene は世間に対し、自己及び相手に対し自分のおかれた位置を確認している。つまりこは自宅だということだ。家こそ人が生きる勇気を獲得する場所であり、それをはっきり言葉に刻むことにより Karl を迎える場所、世の中と戦う足場をかため、心に期したといえる。「ヘレンさん、あなたはまだここにいらっしゃったんですか？」「ここは私の家ですわ。」この指示詞 hier を軸とした短い対話は、二人の緊張した場の千金の比重をえて深い精神的意味を持ち、二人の精神世界の間に確固とした二本の線をひいた。心から心へ——そしてこの二人の精神的統合の第一歩はただこれだけの短いそして日常的な会話によって突如として完成したのである。すべての会話が常にこれほどの深い意味を持つことはない。だがどんなにさりげない言葉、路傍の人との会話でも、対話ということは常に何がしかの量の共通の精神の世界を共同体験することである。話し手はその場の諒解予測性を測定し、聞き手は言語の形式的意味のみならず、場の状況と相乗された言語の現実的意味を把握するという複雑な精神過程が完成したのである。単なる実在が意識的自覚的存在にかえられたのだ。この規定はもっとも単純な言語形式である指示詞にも当然あてはまる。いや、内容の空虚な、もっとも抽象的な指示詞こそ、場の密度の裏打ちをえて初めて言語として十分な意味をもつのだ。

## V

指示詞、とくに *d-Wörter* の検討から場の問題の分析を行ったが、ここでそれに関連して第三者的立場から行う言語の観察と記述の方法と、われわれの現在の立場の相異を今明確に区別しておきたい。言語を *Ergon* あるいは言語作品として観察する立場と、主語を主体的に *Energeia* あるいは言語作用として把握する立場の違いである。例えば代理形式という分類も第三者的立場から外面的になされたものであって、主体的立場からすれば代理ということはいえない。ich はたしかにすべての体詞の代理をなすが、それは第三者の観察した結果論であって、話し手の立場からすれば、ich は自己を表現する唯一の言

語形式であって代理ではない。er も正しく理解されれば、それはそれが指示するものを表す唯一の言語形式である。ただし er の場合にはその使用に際し話し手に課せられる一つの条件がある。er が正しく理解されるためには、その指示するものが、先行する発話過程においてすでに示されていなければならない。この条件を *anaphorisch* というのだが、この条件は第三者的立場からでも勿論規定しうる。しかしここで問題にしているのは、er を使用する際に話し手に直接課せられる条件及びその場において実現する意味の面である。この二つの態度は微妙に交錯し、また相互に限定し合うものであるが、*d-Wörter* の基本性格を規定するためには出来る限りこの両者の態度の差を強調しなければならない。

Brugmann によると *Der-Deixis* は空間に関し特異な意味をもっていた。*d-Wörter* の中には *dort*, *dieser* のように *Der-Deixis* 以外の指示詞もあるが、今 *Der-Deixis* が *d-Wörter* の中核をなすと考えて行く。それは私でもなく汝でもなく、その中間にある位置であり、むしろ純粋な空間の意を越え、私と汝によって共通に承認された場所及びその場所にあることにより両者の間に社会的に承認された存在性の確認を意味する。それは *deiktisch* にも *anaphorisch* にも使用される。いずれにせよ話し手と聞き手の間に *Der-Deixis* によって対象が指示され承認される。„Was ist das?“ という発話は、聞き手との間において初めてなされる第一回の発話過程において十分な意味をもつ。直観の場において *deiktisch* に *das!* と指示することにより直観の世界の中からある部分を切りとり、それを対象として確立し、それに対し聞き手の注意を向けることにより場において共通の存在を確立することができる。だがここで確立したのは、ものの実在性だけであってそれ以上の規定は一つ含まれていない。だから „Das ist eine Heft“ において *das* は *Heft* を指示し、この *das* は性の一致の法則に反しているが、この場合のみ例外的に許されると註釈するのは第三者的解釈であって、話し手にとっては *Das ist eine Heft* は *Das Da-seiende ist eine Heft* と同じ比重を持ち、*das* は直観の世界に連結する言語形式、*Heft* は彼の思考の世界、*Bühler* のいう象徴場につながる言語形式であり、次元の違った存在なのだ。この直観的世界の実在性と結合する力を持っているのが指示詞の特性なのだ。言語形式はどんな具体的なものを意味してもそれ自身においては抽象的であり一般的であって、言語の場に入ることにおいて初めて現実性を獲得する。そしてこの現実定着力を本来の意味の本質とするものが指示詞であり、この鎖によって言語形式は現実化される。代名詞 *ich*, *du*, *er* など、また *der*, *das*, *die*, *dieser* などの指示代名詞、とくに冠詞として使用される *d-Wörter* はその役割を持つ。ドイツ語ではこれらの形式語によって言語が現実との結合力を得、現実の中に根

を下ろして行く。日本語では発語成立過程上において、その間の事情を異にする。日本語は指示詞を多く使用せず、人称代名詞さえもあまり使用しない。そして話し手と聞き手の間に成立した場の暗黙の諒解性にゆだねて言葉を展開して行く。日本語では場の密度の計算に極めて高度の要求がなされているのだ。会話において私、あるいはあなたという代名詞を使用しないのが正しい用法であって、そのような場において代名詞を使用すると、微妙な違った意味を生じかえって誤用となることがある。しかしドイツ語においては二肢文が文の基本形式であり、主語によってある対象が話の場において明確に樹立され、述語がそれに未知の新しい規定をして行く。主語は場における既知概念を表わし、述語は未知概念を示す。従ってこの原則的図式に反する文章形態にぶつかると、文法学者は困惑してしまう。Da kommt ein Mann. あるいは Ein Mann kam uns entgegen. の文は、形式的な主語はそれについて何かが叙述される部分ではなく、むしろそれ自身述語の叙述の一部である。この矛盾を解決するために心理的主語及び述語の図式が持ちこまれる。Da kommt ein Mann. においては心理的主語は da、心理的述語は kommt ein Mann であると解釈する。さらにまた kommt ein Mann においては、Kommt が主語、ein Mann が述語である。H. Paul は、Karl fährt morgen nach Berlin. において「すべてが聞き手にとって同程度に新しいものであるとすれば Karl が主語、それに述語の fährt が加えられる。そして主語としての fährt にはさらに第一述語として morgen、第二述語としての nach Berlin が来る。だがもし聞き手が Karl の明日の旅行は知っているが目的地を知らないとすれば、nach Berlin のみが述語である。」と言っている<sup>9)</sup>。つまりこの文における主語は場の密度によって決定されるのであり、形態的には不可能であるということになる。しかし、文の心理的主語が日本語においては全く場の諒解性にゆだねられ、それを土台にして文が形成され、文中に現勢体として出現しないことが多々あるのに対し、ドイツ語においては正しい文法的構造としてはそれが何らかの形で文中に出現するのが原則であり、そしてその最も弱い言語形式として代名詞や指示詞とくに *d-Wörter* が使用される。deiktisch にせよ、anaphorisch にせよこれらの言葉は場における高い諒解性の密度を持っているからである。

## VI

*d-Wörter* の中で名詞と連関して用いられる代名詞の中で *der, die, das* の系統が、使用頻度が一番高い。そしてそれらは指示代名詞のほかに関係代名詞、冠詞として従来は分類されているのだが、これは前述のように同じ意義素が、文法的に違った機能をもったと考えられる。その差は *des* と *dessen* や

in dem (関係代名詞) と im のように形態に現われる場合もあり、又ただ音声的に強め二次音素の差しか持たぬ場合もある。その差を書記において *der* あるいは *d e r* と明記することになっているが、必ずしもすべて厳守されていない。*der* が指示代名詞か冠詞かという区別はもともと第三者の立場から判定されるもので、言語の内部から常に自覚的に峻別されているのではない。その差違は音声の強めにおいても意義においても流動的なのである。ただ *der* が弱い強め二次音素を付して使用される場合、冠詞という文法形態を生み出したのは単に *der* の意義素の独自の発展ではなく、名詞並置の数詞 *ein*、さらにこの両者を伴わぬ名詞、いわゆるゼロ冠詞との対立と対照によって新たに発展した形式なのである。しかし冠詞は、たとえゼロに近い薄弱な強度しか残していない場合にせよ、本来の意義素が文法的用態素に全くおおい尽くされてしまったとはいえない。両者の間の比率の問題にしかすぎない。

ところで冠詞として使用された *der* に関し、それは名詞との二重措定、言葉の重複使用ではないかという Glinz の皮肉な発言がある<sup>10)</sup>。例えば *der Mann* において同一物を一たび一般的に *der* で指示し、もう一度特殊な名詞でさらに指示する。それは丁度 *aus dem Haus heraus* や *durch den Wald hindurch* の用法に類似し、誇張した極端な類型を示せば、*er schlief* の代りに *er war schlief* を、*wir kämen* に対し *wir wären kämen* を使用する不合理に等しいのではないかというのである。

形容詞が名詞を限定するように、冠詞も名詞を限定し一般を特殊に全を個に限定するという説においては、冠詞は名詞に対し限定的機能を持ち、名詞と同資格ではありえない。*alter Mann* において、*alt* と *Mann* を同一視しえないように *der* と *Mann* を重複使用と断ずるのは全くの愚論となる。しかし Glinz の奇妙な発言の真の意図はこの限定説の根拠をゆり動かすことにある。*der* は *Mann* の概念を限定するのではなく、*der* も *Mann* も同一物を意味する。ただ *der* は指示詞として直接に、*Mann* は名詞として間接に指示する。なぜならば、名詞は直観の場にあってもものを直接指示する力を備えていないからだ。本がのっている机を前にして、どんなに声を大にして「本!」とどんでも、その机上の本を直接意味しない。本の意義素は一般的抽象的であるからだ。机上の本を意味したいならば、聞き手の注意をまずひきつけその後で「本」と言わなければならない。聞き手の注意を促す言葉は指示詞である。指示詞との連結形となって名詞は具体的な個物を初めて意味しうる。直観の場においては身ぶり言語的指示詞との簡潔な結合で十分意をつくしうるのに対し、リレーされた言語では事情が複雑になる。現場性のない特定個物の直接指示はできない。そこで聞き手を言語的に現場に連行しなければならない。先ず私の家につれてくる。そして机の上に本が一冊しかないことを見せる。その後

で初めて das Buch ということができる。Ein Buch liegt auf meinem Arbeitstisch. という発話過程によって現場を聞き手に言語的に体験させねばならないのだ。

定冠詞は特定個物を意味し、不定冠詞は不特定の個物を意味するというが、実在的には同じ個物を両方の冠詞で規定することができる。蔽に眼の前にある特定の個物でさえも、不定冠詞でしか意味しえない場合がある。冠詞の使用はその意味するものの側から来るのではなく、発話の場の密度によって決定される。今ここに一脚の机があり、それを前にしてもっとも単純な次のような対話がなされたとする。

Was ist das ? (A)

Das ist ein Tisch. (B)      Das Tisch gehört mir. (C)

A文の主語 das は直観指示であり、B文の das はA文の直観指示により直観の世界の中から切り取られ、両者の間に言語的に設定された実在物を意味する。それに名称が述語として付加された文がBである。Bの発話過程において十分な現実性を持つ言語形式は das であって、ein Tisch はまだ観念的規定であり、この発話過程が完了することによって、das Tisch は両者の間に知られたものとなる。この諒解の段階を経なければ das Tisch が心理的主語として登場しうる場が成立しない。机そのものは発話の前後を問わず依然として同一不変であるのに対し、言語の面では das, ein Tisch, das Tisch の三つの異なった形式をもってそれを把える。しかもこの間に諒解性の段階的な発展過程がある。不定冠詞 ein も個体を指示し存在性をも意味しうるが、それは多の中の任意の一を意味し、可能性としての存在性しか持たず、Das ist ein Tisch.において、直観されている個物を話し手と聞き手に対し共通に指すのは das だけであり、ein Tisch は話し手においては具体的個物であるが、聞き手にとってはこの場において初めて知る観念形態なのである。そのような諒解性の予測の下に命名文は成立する。Ich hatt' einen Kameraden. においては事情が違ふ。einen Kameraden は勿論具体的個物をも意味する。だがそれはリレーされた言葉と同じく現場性を持たず、その意味において話し手と聞き手の間に特定の個物としての現実性を持ちえないのだ。話し手が特定の個物に言及するとき、他のものによって代りえない、その特定の個物そのものを正しく聞き手が諒解すると予測しうるとき、その時に初めて定冠詞を用いる。従って定冠詞には同一の個物についての共同知識を予想するために常に話し手と聞き手の間に親しさの感じを生み出すものである。

冠詞の理論として、個体化、特定—不特定、未知—既知及び実在化の諸説が多く説かれているが、これらの理論は主体的立場よりもむしろ第三者的立場か



ら批判的に考察されたものであり、主として言語作品を観察、整理、記述して冠詞の意義を規定して行くのである。しかしながら、専ら主体的立場に立ち発話の場から言語を体験する場合には、対象を発話意図に沿って如何に表現するかが主要テーマになる。いわば言語の工学であり、技術の問題になる。唯一物といわれるもの、例えば太陽は即座に *die Sonne* と言ってよい。発話の場において正しく同じ太陽についての共同体験を予測的に前提しうからだ。だが「私の小鳥が逃げた」という場合には諒解性の予測はそう単純ではない。私にとってはその小鳥は特定既知の個物であるが、聞き手がそれについて知っているかどうか、この小鳥に関して場の諒解性の密度が十分に高いかどうかを予測し、密度が高い場合はその発話過程において即座に *der Vogel* と言うが、そうでない場合は先ずその小鳥の説明をしなければならない。この段階の *ein Vogel* が、その発話過程完成後に初めて *der Vogel* の形式に上昇しうる。*Der Vogel hat fortgeflogen.* は文法的誤りであり、この文を使用するのは言語技術上でも同様に誤りである。*Der Vogel ist fortgeflogen.* は文法的には正しいが、場の密度の測定を誤っている時には、*„Der Vogel? Welcher denn?“* のような反問を受けておそらく発話過程は完成しない。この定冠詞使用の誤りをなお文法的誤用というならば、この文法規則を樹立する基礎は主体的な言語技術上の場の密度予測性であって、第三者的観察から帰納しうる可能性は根拠づけに極めて困難だといいたいのである。

最後に個有名詞について少しふれる。個有名詞はゼロ冠詞が原則である。その理由として下のような図式を適用したい。

Was ist da?

Da ist ein Mann.

Der Mann heit Karl.

Karl ist also da, usw.....

Karl の言語形式はこれだけの密度を必要とする。個有名詞はゆるぎない特定個人を意味する。しかし個有名詞ほど空虚な抽象的な言語形式はない。それがだれを指示するか、お互いに知り合っている間柄においてのみ完全な内容を持ち、そうでない場合はこの形式は救いようがない。日常語の *der Karl* は Karl の既知性を前提としている。未知の Karl はどんな冠詞、指示詞、形容詞によって限定されても特定個体を指示しえない。この理由によって、それが正しく諒解される可能性を予測して使用される場においては、ゼロ冠詞が言語経済法則上の最も適切な言語使用法なのである。日常語において冠詞を付するのは、定冠詞のもつ親しさの色調をさらに加えたものである。個人の既知性が全く存在しない場、例えば不特定多数の読者に対し特定個人を指示したい場合

には、読者を現場に連行するより外はない。その言語的手続きのもっとも類型的表現が年令、職業、住所の列記である。写真があればなお好い。これらの資料を手がかりにして読者は心理の世界において本人を探訪しその眼で確認するわけだ。このようにして言葉は実在性を仮構する。直観の世界において実在性を確認しうる者の間ではこんな面倒な手続きはいらない。Karl あるいは der Mann という経済的な簡潔な形式で事が簡単にすむのだ。だから定冠詞＋名詞の形式はある意味で個有名詞と等価性を持つ。さきの図式で Der Mann heißt Karl と、同一性規定文 (Gleichsetzungssatz) の主語と客語に両者が位置しているのは決して偶然ではないのである。

#### 注

- 1) Walter Porzig: Das Wunder der Sprache, 2. Aufl., Francke 1957, S. 24.
- 2) Jacob Wackernagel: Vorlesungen über Syntax, 2. Reihe, S. 101.
- 3) Hans Glinz: Die innere Form des Deutschen, Francke 1952, S. 117ff.
- 4) Leonard Bloomfield: Language, 1933, S. 247ff.
- 5) Jacob Wackernagel: Dasselbe wie oben, S. 102ff.
- 6) Otto Behagel: Deutsche Syntax II, S. 270.
- 7) Hans Glinz: Die Leistung der Sprache für zwei Menschen, veröffentlicht in Festschrift für Leo Weisgerber: Sprache, der Schlüssel zur Welt, Schwann 1959, S. 87ff.
- 8) ebenda, S. 89.
- 9) H. Paul: Prinzipien der Sprachgeschichte, S. 283.
- 10) H. Glinz: Die innere Form des Deutschen, S. 266.